

一陽来復祈願能 in 和歌山御坊

於 御坊市民文化会館
令和三年十一月十一日(木) 午後二時始

翁

分林道治

面箱 茂山虎真
三番三 茂山逸平
千歳 河村和貴

大鼓 河村 大
脇鼓 上田敦史
頭取 大倉源次郎
脇鼓 荒木建作

笛 杉信太郎

後見 青木道喜
大江又三郎

地謡

河村和晃 片山伸吾
吉田篤史 杉浦豊彦
田茂井廣道 井上裕久
浦部幸裕 浦田保親

狂言後見

茂山宗彦
島田洋海

～(休憩十五分間)～

能

片山九郎右衛門

道成寺

宝生欣哉

則久英志
梅村昌功

間 茂山七五三
茂山宗彦

大鼓 石井保彦

太鼓 前川光範

小鼓 吉阪一郎

笛 森田保美

後見

橋本忠樹
小林慶三
大江信行

地謡

樹下千慧 吉浪壽晃
宮本茂樹 浦田保浩
松野浩行 河村和重
橋本光史 古橋正邦

鐘後見

味方 玄 大江広祐 深野貴彦
味方 團 河村浩太郎

狂言後見

茂山逸平 鈴木 実
島田洋海 柴田鉄平

終了予定

午後五時頃

能 翁

面箱を先頭に立て、翁、千歳、三番三、囃子方、後見、地謡の諸役が橋掛りから登場。翁の役者は舞台右奥に着座し祝言を誦す。千歳の役は、観世流ではシテ方が演じる。千歳の舞は若者の颯爽とした舞で、翁の露払いとしての性格を持つ。その間に、翁の役者は翁の面(白色尉)を舞台上で前を向いたまま着ける。千歳の舞が終わると翁は立ち上がり、祝言の誦と祝の舞を舞うと、もとの位置に着座して翁の面をはずし、退場する。翁が千歳の舞と翁の舞の二場面からなるのと同様、三番三も「採ノ段」と「鈴ノ段」の二つの場面からなっている。「採ノ段」は面を着けず、リズムミツで躍動感あふれた舞。次に三番三の面(黒色尉)を着け「鈴ノ段」で鈴を持って祝いの舞を舞う。舞が終わるともとの位置へ戻り面を取り、退場する。

「翁」は「式三番」ともよばれ、能・狂言のルーツともいえる、古風で独自の様式を持った、祝言性に満ちた儀式的な芸能である。

通常の能では、シテは幕内で面を着け、ひとつの役がらになってから登場するが、「翁」では、役者はあくまで「人」として登場し、舞台上で面を着けることによって「神」に変身する姿を見せる。能の囃子は笛、小鼓、大鼓、曲により太鼓によって構成されるが、「翁」では小鼓が三人登場し、翁の舞が終わる翁の役者が退場するまでは、笛と小鼓三人だけで囃す。三番三になってこれに大鼓が加わる。小鼓は頭取(リーダー)と他の二人が異なったパターンを打ち、独特かつ複雑なリズムを刻んでいく。地謡も「翁」に限って、いつもの舞台右側の地謡座ではなく、舞台後方の囃子方の後ろに座る。

「能楽鑑賞百一番」淡交社より

能 道成寺

紀伊国道成寺の釣鐘が失われてから、時が久しくたった。その再興の日のこと、住僧は能力に女人禁制を申し渡す。そこへ白拍子の女が来て能力に頼みこみ、舞を見せることを条件に寺内に入れてもらい、乱拍子(らんぱし)など舞ううち、隙をうかがって鐘に近づくと鐘は落下し、女はその中に消えた(「乱拍子(急ノ舞)ノ地中入」。能力から知らされた住僧は、それは怨霊の仕業であろうと次のように物語る。昔、この国のまなごの長者の娘に慕われた山伏が、この寺に逃げて来たので、寺では釣鐘を下ろして隠したところ、娘は執心のあまり大蛇となって追いつがり、鐘に巻きつくと鐘は溶けて山伏は死んだというのである(語り)。先白拍子はその娘の怨霊であろうと、住僧たちが鐘に向かって祈ると、鐘は再び上がり、鬼女の姿が現れる。鬼女は僧にいとみかかると、祈禱の力に負けて逃げ去って行く(「イノリ(中ノ地)」)。

道成寺縁起などに取材し、恋の執念を描いた作品。観世信光作といわれる《鐘巻》を短く切りつめ、《乱拍子》を眼目に再構成したものと考えられている。乱拍子は、小鼓の打音と鋭い掛声に合わせ、足を踏み出したり、爪先やかかとを上げ下ろしたりする所作を繰り返して、囃子の段ごとに足拍子を踏んで区切りをつけていく。その一つ一つの足遣いの間に、長い間合いを計るコミが置かれ、他の舞事とは趣をまったく異にする。この乱拍子をはじめ、続いて演奏する急ノ舞、舞台中央に釣り下げられた鐘に飛び入る中入と、緊張が長時間続くので、体力を要する能といわれ、重い習物(ならいもの)とされている。

歌舞伎、沖繩舞踊などに影響が大きく、多くの(道成寺物)が作られている。

「能・狂言事典」平凡社より

- 会場内では、必ずマスクの着用をお願いいたします。
- 会場内、ロビー等での大きな声での会話は、ご遠慮ください。
- 受付にて体温計測を行います。
- 体温が三七・五度以上の場合には入場できません。